

資料1 寄せ場とは何か

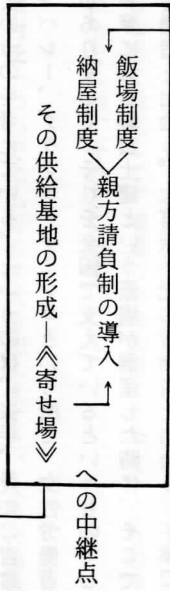
1. 江戸時代—商品経済の発達 (↓幕藩体制の矛盾)
 逃散農民の都市への集中↓治安のため (人足寄せ場)

2. 維新後—原蓄の本格化 (賃労働の創出)

人足寄せ場をテコとした (囚人労働) を
 監獄労働

補給源とする

横須賀造船所
 炭坑 (北海道・九州)



・離農農民の流入
 ・渡日朝鮮人を中心とする
 被植民地人民の流入

3. 戦前日帝の労務供給体制

寄せ場 ↓ 飯場制度
 納屋制度

4. 戦時—労務報国会

・産業報国
 ・強制連行

5. 敗戦

労務報国会 ↓ 労務協会 ↓ 職安行政

を補完する柱としてのヤクザ支配 (手配師制度)

← 仕事よこせ / 米よこせ

49年 失業問題—失対闘争

50~53年 朝鮮戦争

55年体制 議会制民主主義

民同労働運動 ↓ 疎外されたものとしての寄せ場

6. 60年代—経済侵略の再開 ↓ 高度成長

農村の解体
産業構造再編
都市への労働力の集中
↓
戦後寄せ場の形成

※ 一九六五年 日韓条約 新植民地主義侵略

↓ 日韓体制 → 在日朝鮮人資本の独占への吸収

— 在日朝鮮人労働力の同胞資本への包摂

南北の固定化 資本に対する闘争が組み難い

構造が作り上げられる

△暴動△55年体制下で

7. 74年生産過剰恐慌

独占の再編

産業構造の再編

行革（生活破壊、イデオロギー攻撃として）

80年代 総合安保構想 → 軍事だけでなく生活も組み込んだ安

保体制 ↓ 動員構造の転換

・寄せ場支配の再編

資料と 釜共と 異半制力

資料2 釜共・現斗時代

〈前史〉

。戦闘的行政闘争 ドヤ占拠—地区ソビエト 現場闘争の提起

全都射程

〈準備期〉

。「裸族の旗」 S問題 「狂気」—階級矛盾抑圧に対する現状打

破のエネルギー

下層社会の分析 「市民社会」批判

寄せ場労働者：凝縮された階級

矛盾、階級苦を負わされている

存在

「反乱を組織する、反乱が反乱を組織する」

流動的の下層労働者規定：

流動性の組織化①、②、③

それまでの寄せ場の運動の総括

第1期 悲惨と貧困の宣伝「こんなにも「不幸」

な人々がいるのに、貴方がたのみが「幸

福」で良いのか？」：手をさしのべま

しょう。

〈本史〉

。現場闘争

(個別資本との実力対決を通して総資本と対決する勢力を形成する)

位置付け ①朝の「寄せ場」をめぐる支配と被支配の関係を

逆転させる運動

②人民の海、根拠地形成をめざす 労働者が自ら

の力に確信をもち、権力意識に目覚める

戦術 「ケタオチ現場でガタクロー」 現場↑センター

①寄せ場において手配師、親父のつるし上げ

②ヤクザとの対決 権力の弾圧の封じ込め

③ 道理あるやり方で闘い、闘う仲間うちの育成を
はかり、広範に同調者をつくり出していく

「労働条件は労働者が決める」という思想、姿
勢

(1) やるべきことをやって文句を言う

(2) トンコする（条件違反の場合、次の朝センタ

ーで賃金要求）

(3) 徹底的にサボる

※飯場闘争

飯場制度ー労供制度

。暴 動 積極的位置付け「都市人民戦争論」

（自己の抑圧された状況を武器に転化せよ）

現状を打破していく物質力を持ったものとしての下

層労働者のプロレタリア性

平面的拡大路線の破綻

寄せ場の闘いの位置と総括

戦前 在日朝鮮労総 関東自由 全協土建

戦後 日帝敗戦直後の鉦山等での反乱（朝鮮人、中国人）

「職よこせ」闘争 全日自労

朝鮮戦争時 祖防隊「新朝鮮」

55年体制

三井三池闘争 60年安保闘争 山谷、釜ヶ崎暴動 65年日

韓闘争

学園、70年反戦・反安保闘争

。国家・資本の労働力政策

戦前 総動員体制ー強制連行

戦後 失業ー失対 独占資本の復活（朝鮮戦争）ー高度成長

ー日帝の復活ー日本列島改造論ー石油ショックー構造

不況

。スラム街ー高度成長長期膨張（労働力市場）ー石油ショック後疲

弊化

。対策：一貫して治安対策

。現闘・釜共の闘い

。抑圧された状況に規定され、そこからのラディカル性は、もの

ごとを根本からつかみ出せる位置にある：帝国主義支配との対

決

特別の不正ではなく、不正そのものを被っている存在：現状打

破の革命性

。労働者性（階級性）、戦闘性（暴力性）、大衆性の獲得：既製

労働運動（組合主義）批判

。国際主義「釜ヶ崎反入管通信」(73・2) 「第3世界」人民との

連帯

限界

「市民社会」と対置 階層性の固定化 孤立化 階級全体の観

点の不充分性 主体の飛躍の契機の喪失 政治路線の不確定さ

行動スローガンの団結 運動論、組織論のいきづまり

弾圧

年 表

<p>△前史▽ 一九六八 一九六九</p>	<p>釜ヶ崎</p>	<p>山谷 山</p>	<p>備考</p>
<p>一九六九 12 11 10 7 6</p>	<p>全港湾建設支部西成分会結成</p>	<p>山谷自立合同労組結成（山自労） 全港湾東京支部山谷分会結成 山自労書記局派</p>	<p>梶大介 広大グループ</p>
<p>一九七〇 5・1 10・1 12・30</p>	<p>第1回釜ヶ崎メーデー センター詰所放火「仕事出せ」</p>	<p>東京日産労働組合（東日労）結成 全都統一労働組合（全統労）</p>	<p>「あいりん」総合福祉センターオープン</p>
<p>一九七一 1 6 9 10</p>	<p>第1回釜ヶ崎越冬闘争 辰巳運輸「押しかけ就労」闘争 弾圧↓抗議↓暴動 壺山建設就労闘争 労働者を殴った「神戸屋」焼き打ち↓暴動 福山鉄工「押しかけ就労」闘争 事後弾圧（4名逮捕、3名起訴） このころ「現場闘争」提起</p>	<p></p>	<p></p>

	釜ヶ崎	山谷	備考
<p style="text-align: right;">一九七三</p> <p style="text-align: left;">一九七四</p> <p style="text-align: center;">12 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1</p>	<p>12・25 第3回釜ヶ崎越冬闘争</p> <p>2・15 横山組追放闘争</p> <p>3・20 市土木局職員の差別発言</p> <p>4・6 市土木局糾弾闘争 関西徐さん支援連絡会議と共闘</p> <p>4・12 弾圧(4名逮捕) 第2次関建</p> <p>5・1 第4回メーデー</p> <p>6・28 山岡建設闘争</p> <p>7・23 ハンスト 24排除</p> <p>7・31</p> <p>8・13 第2回夏祭り 3名逮捕</p> <p>12・4 第4回越冬闘争 府庁前ハンスト</p> <p>29 收容所、テント村での闘争</p>	<p>12・4 浅警・マンモスによる弾圧</p> <p>12・8 八日会結成→現闘対策</p> <p>12・10 釜ヶ崎より援軍(約60名)</p> <p>12・13 「山谷・釜ヶ崎連帯集会」(於明大)</p> <p>12・30 第1回山谷越冬闘争</p> <p>4・9 東日労「ヤミ配師追放」を掲げ、夜ヘルメット姿でデモ、日の丸青年隊から襲撃される</p> <p>現闘委有志参加</p> <p>7・20 新井技建闘争</p> <p>山谷夏祭り(センターで映画会)</p> <p>8・21 白石工業闘争</p> <p>9・11 林グループ(極東組系)と対決→暴動</p> <p>10・5 新栄電設闘争</p> <p>12・29 第2回越冬闘争</p> <p>12・13 特出しに対するバス乗り込み就労闘争</p> <p>緊急保護獲得闘争</p>	<p style="text-align: center;">「冬將軍を撃て」</p> <p style="text-align: center;">「オイルショック」</p>

資料 3

日雇共斗から日雇全協の結成へ

一、日雇共斗前史（寿主導）

- 労活系による寄せ場運動のテコ入れ 七四～七六年
- 極端なアブレ地獄の中で、吹き出し、行政追及……戦術面
(都、労働省)
- 救済主義、労働運動一般への寄せ場の運動の解消……路線面
- 支援代行主義、労働者自前の団結の否定……組織面
- ▲ 名古屋、東京、横浜など三回の交流会での熾烈な論議——特に寿町からの支援代行批判および実力斗争方針の提起
(実地にはうつされず)
- ▲ 釜ヶ崎では、独自に労働過程をめぐる斗いに労働組合（執行部）建設の方針（七六・一・一六）
- 七七・四・一七 日雇共斗結成と前後して、分裂少数派組合運動とのアナロジー（梶大介氏）による代行主義の合理化、共斗の否定で、三里塚現地での実力糾弾に結果する。

二、日雇共斗の時代（釜主導）

- (1) 三里塚と狭山の斗争に媒介された全国団結
▲ 空港開港策動の激化

▲ 狭山斗争の全国斗争としてのスタイルの維持

△ 結果の軸をめぐって▽

▲ 寄せ場労働運動の基本方向をめぐる論議……日雇差別糾弾、完全解放の傾向に対して

内容的には、釜ヶ崎から日雇労働者の就労過程をめぐる斗いの組織化

▲ 山日労・釜日労での労働相談、生活相談活動の一定の定着

▲ 寿日労の生活館占拠と、労働者（現役層）からの反発

△ 運動的にみると▽

▲ 釜日労が七六・七に組合を発足して以来、寄せ場に定着し、定力を強め、現斗・釜共斗以降の寄せ場労働運動の成果と組織を防衛し、全国寄せ場の拠点として成長した

▲ 寿では労活（神奈川労活連系）との分岐、労活の拠点撤収と照応する形で「自前の団結」を求める方向が強まるが、生活館占拠の重圧の中で、現役層との回路を見出せぬまま、活動家層の分散の中で停滞を余儀なくされる（寿共同保育などの試み）

▲ この日雇共斗の時代の主体的な面をもっとも象徴的に示した

(2)

ものとして、山日労(準)があげられる。

山日労の生成と解体

▲七六・一一 「谷の会」、旧「山谷救済会」のグループで

「S斗会」結成

主張として、仲間意識、常習累犯―差別と闘う、怒りを斗いに!

ピラを職安でまけない状況↓労働相談の定着

▲七七・八・一五 山日労(準)の結成、「あいいうえお学校」

「福祉窓口斗争」

権利拡大にむけて、労働相談活動と行政斗争

(総合要求運動)

現場斗争をめざすも、現役層少なく、戦術方針が定まらず頓座(押しかけはよくやった)

▲七七・一〇〇―一一 第一次分裂―フラクション批判

(「谷の会」と「資生堂」)

▲七八・三〇八 第二次分裂―指導者批判と外回り批判
敵環ののせず
通防せ
問攻出
織のの見
組とを

▲七八秋 連続争議(青山、込山、フジタ、西武)、元請けの

責任追及↓経済主義の落し穴

九州土建問題……山統労との競争、はり合い

一二・一四弾圧

▲七八〇七九 越冬斗争(共斗―共斗おしつけ反対↓一・三石

浜の「内ゲバ」)

七九・二 アパート追い出し、全活動家のトン

コ

(3)

反弾圧、あいいうえお、労相・生相に限定しての
活動再開、「医療と福祉を考える会」

▲七九・一〇・三 爆取弾圧↓三者共斗の時代へ

総括視座

イ、日雇労働者完全解放のスローガン(右翼下層主義)

ロ、経済的課題の斗い方(結果としての改良主義)

ハ、労働者の組織化の視点(労働者の保守主義に拝跪……サークル主義、セクト主義)

ニ、組織原則のデタラメさ(反党派、大衆運動の私物化根性)

ホ、路線的団結の不在(好き嫌い、身内意識、実践的訓練の不在)

三、三者共斗から交流会へ

●七九・一〇・三 爆取弾圧(反弾圧共斗)―村田、菅林、飛島斗

争↓越冬斗争

●「六・九斗争の会」からの要求

①一・三石浜「内ゲバ」総括問題(共斗のあり方)……カンパニ

ア共斗批判へ

②半タコ戦の斗争方針討議の呼びかけ

●第二回六・九集会

●前田建設―最上鉄筋斗争(現場制圧―大衆団交を基礎に元請け追及)↓資本の暴力と対決する階級的労働運動の総括

●山村組争議をめぐる方針討議―争議―その総括論争

●八〇・八・二〇三↓八〇・八・二九〇三 有志による交流会の

発足

四、交流会の諸原則と山統労問題

- (1) 交流会の三原則とカンパニア共斗批判、総括の方法と一〇年間の総括の共有
- (2) 山統労問題
イ、八一・一〇・二↓一〇・一四↓一〇・三一↓二二・一四↓越
冬斗争
ロ、総括内容
ハ、セクト主義批判
- (3) 八二・七・四 三里塚での内ゲバ（背景に四・二五暴動評価、日雇全協大会へのプロ革の敵対）
八三・一・三 団結問題↓八四夏祭りをめぐる
交流会の実践
- (4)

五、創立大会から第二回全協大会へ

- (1) 日雇全協創立大会の意義と問題点
- (2) 第二回大会に問われているもの

年 表

年	1976年	1975年	1974年	年
8・15 「山日労(準)」結成	11 「山谷S斗会」結成 「谷の会」結成 労働者部分のしめ出し	5 2 山自労山支連炊き出し 山支連正式発足(労活軸) 自由就労活動	2 国民春斗集会演壇占拠 (現斗)	山 谷
	1・16 交番襲撃 9 六名釈放 寿自治会糾弾斗争敗北 一時金斗争(五、〇〇〇 ↓八、〇〇〇円)	2 公会堂総決起集会 (二〇〇名) 5・18 「寿日労」結成 10~11 仕事よこせ職安 連続斗争	11・20 越冬委 21 対市交渉18時間 一時金五〇〇円 22 生活館占拠 越冬斗争突入	寿 町
7 柳井建設飯場斗争 (労働相談テコに) ・勝利号	7 「釜日労」結成 パンフ「寄せ場は社会 主義を求める」	2 テント村強制代執行 ・弾圧の嵐	10 釜共斗、行政班の仕 事保障期成同盟の建 設↑行政の封じこめ 越冬 花園公園占拠	釜 ヶ 崎
	名古屋駅からの日雇 労働者しめ出し反対 で支援(キリスト者、 有志労働者)弾圧さ れる(市役所+公安 官)			笹 島
4・17 「三里塚・狭山を 闘う全国日雇共斗」結 成	3 釜、寿、山谷独自の労 働省斗争(仕事よこせ、 総合対策要求) 三〇〇名	6・25 船本氏焼身決起 労活寄せ場分科会	労働、寄せ場分科会	備 考
	2・16 鈴木国男氏虐殺 3 釜、寿、山谷独自の労 働省斗争(仕事よこせ、 総合対策要求) 三〇〇名	3 「日雇労働者解放同盟 (準)」の結成 4・1 総評全日自労すわ り込み斗争に寿、山自 労参加(仕事よこせ) 6・25 船本氏焼身決起 労活寄せ場分科会	塩島組斗争↓太陽船舶斗争 (寿労共斗)	

1980年	1979年	1978年	1977年	年
1 三者共斗越冬 5 タコ部屋調査(8月) 6・7 最上鉄筋・前田斗争 9・29 山村組争議敗北	1 越冬斗争(石浜公園共斗問題) 1・3 山統労と内ゲバ 2 山手企業争議(ストライキ、三〇〇名のつるしあげ) ・「6・9斗争の会」発足 ・山日労、実質的に解体	1 越冬斗争(教会、人パト、炊き出し、収容所)―山日労 9 九州土建争議	山自労解体状況	山 谷
12 6・1 生活館占拠解除 一時金、 一三、五〇〇円	12 一時金、 一一、〇〇〇円	6・10 住民懇談会発足 12 一時金、 一〇、〇〇〇円		寿 町
11 丸栄建設斗争 3 「釜ヶ崎争議団」結成―西幡争議		10 中島組争議 大久組系、連続した飯場争議 ・一〇〇円訴訟問題↓稲垣追放	・釜ヶ崎解放会館設立	釜 ヶ 崎
8・1 山口組に対する斗い(全国斗争)	・準備期	8 名古屋日雇労働者有志の会発足(駅手配との斗いめざす)		笹 島
	10・3 爆取弾庄―反彈共 6・9 磯江氏单身決起 22 釜弾庄―反彈共(釜)	11 日雇共斗総括論議 (79・4)	5 鉄塔決戦 ・刑法・保安処分「公聴会」 粉碎斗争	備 考

編集後記

日雇労働者運動を現在中心的に担っている部分が、寄せ場の歴史、とくに斗いの歴史と現状をどのように把握し認識しているか、ということでまとめてみた。

斗争史の総括としては、当然不十分である。たとえば、戦前全協の活動、戦後日共主導の職よこせ斗争など、六〇年代前半期の梶大介や竹中労を軸としたグループの運動ぐらひは、今日的観点からの点検と位置づけがなされる必要があるのではなからうか。寿や笹島からの照射も足りないと思う。だが一方で、釜共・現斗自体とそれ以降の日雇全協に至る過程が、多少とも系統立てて叙述されたことはないし、したがって全体化、共有化されていない現実がある。本冊が、斗いを総括し経験と知見を蓄積する上で、多少とも役立つことができれば幸いである。

一九八四年春に発足した三多摩・山谷の会は、集會、連続学習會、イベントなどを相次いで催し、さきにはニュースとして『山谷の会だより』も創刊した。

学習會で話がされてから六ヶ月経った。その間、テープ起し、原稿整理（訂正補修？）、タイプ、印刷、製本と、じつにたくさんのお世話になった。各位のそういった尽力が報われて、圧倒的多数の労働者、農民、漁民など、あるいは市民、学生等々に本冊が読まれることを切に望むものである。その売り上げを得て（）、青木秀男、金石範両氏の講演と八・二六パネル・ディスカッションの公刊化も、ぜひ実現したいと願っている。（84・12・3 T・M）

寄せ場の歴史から未来を見通す

— 連続学習會記録(1) —

発行日 一九八四年二月七日

発行人 三多摩・山谷の会

連絡先 東京都国分寺市本多一―一六

松 沢 哲 成 方

電話 〇四三二五―四八八五

印刷所 ジャム・プリント

電話 〇三七八〇―一六七四〇

頒価 700円